

## ルカによる福音書8章1－25節 「聞く耳のある者たち」

### 1A 女弟子たち 1－3

### 2A 喩えに対する耳 4－18

1B ありふれた光景 4－8

2B 尋ねる者へ解き明かし 9－15

3B 現れる奥義 16－18

### 3A 聞く者たちの信仰 19－25

1B 新しい家族 19－21

2B 嵐の中の訓練 22－25

## 本文

ルカによる福音書8章の前半部分を読んできたいと思います。私たちは前回、イエス様がバプテスマのヨハネのことをお語りになったところを読みました。ヨハネが語った神の言葉によって、多くの人たちが悔い改めたけれども、律法学者やパリサイ人は自分を正しいとしたので悔い改めることをしませんでした。そして、表面的な、ヨハネとイエス様との違いで批評していましたが、「知恵の正しいことは、そのすべての子どもたちが証明します。(7:35)」と言われました。つまり、主の教えを聞いて、変えられた人々の間に神の国が押し寄せているということです。

その一人が不道德な女の変化です。パリサイ人シモン家にイエス様が招かれましたが、その女がイエスのところに来て、その御足のそばに立ち、涙で御足を濡らし、髪の毛で拭き、口づけをして、香油を塗りました。これをシモンが見て、心の中で「預言者であれば、彼女が不道德な女であることを知っているはずだ。」と言いました。イエス様は、借金の帳消しの例えを使って、彼女が多く赦されたから、多く愛しているのだと話されました。ここでの問題は、シモンもこの女と同様に、罪深い者であることに気づいていないのです。彼女は不品行という罪ですが、シモンは高ぶりという罪であります。そして彼女は罪赦されて、そこから来る神への愛からイエスへの良い行ないをしましたが、シモンは客に対する敬意をイエスに示していませんでした。行わないという罪です。

ですから、この女によって知恵の正しいことが示されました。単に語っていること、教えていることが正しいように見えても、事実、罪が赦されて変えられた人生がここにあり、神の国は広がっているのです。そして8章は、イエスが続けて宣教の働きをしているところから始まります。

### 1A 女弟子たち 1－3

8:1 その後、イエスは、神の国を説き、その福音を宣べ伝えながら、町や村を次から次に旅しておられた。十二弟子もお供をした。

イエス様が、「神の国を説き」と言われる時に、私たちはルカの福音書を学んでいて、それが単に口だけの説法ではないことを知りました。生きている現実、イエスの教えによって変えられている姿が実在していることが分かります。そして、それは「良き知らせ」、福音です。貧しい者に天の望みが与えられ、囚われている者たちが解放され、病の者たちは癒されます。

そして、旅をしておられますが、その時はいつも「十二弟子もお供を」していました。イエスは何でもできる方ですが、弱い人間である弟子たちと共におられて、事を行われたのです。私たちは、キリスト者の生活が個人プレーではないことを学びました。教会という共同体があって、イエスは働かれます。

8:2 また、悪霊や病気を直していただいた女たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリヤ、8:3 ヘロデの執事クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか自分の財産をもって彼らに仕えている大ぜいの女たちもいっしょであった。

ルカによる福音書の特筆すべき点の一つが、女たちの働きです。7章でも、私たちは罪深い女が回心している姿を見ました。イエスによって罪が赦されたことの証しでありましたが、同じように、他の女たちも悪霊から解放されたり、病が癒されることによって、イエスに自分自身を捧げるよう決めたのです。指導的な働きは十二弟子のように男が担うことが理想ですが、しかしそれは、女が働けない、用いられないということでは決してありません。むしろ、主に大いに用いられるのです。ここでマグダラのマリヤを筆頭に女たちが書き記されているのは、イエスがよみがえられた時に彼女たちが第一目撃者であったことを意識しているかもしれません。

マグダラのマリヤは悪霊を追い出していただいたという感謝が根底にあるでしょう。けれども、ヘロデの執事の妻がここにいます。彼女は良い生活を営んでいたでしょうが、しかし心にある貧しさはマリヤと同様にあったことでしょう。ここにいる裕福な家を背景にした女たちは、物質的支援によってイエス様の宣教の働きを支えていました。

## **2A 喩えに対する耳 4-18**

### **1B ありふれた光景 4-8**

8:4 さて、大ぜいの人の群れが集まり、また方々の町からも人々がみもとにやって来たので、イエスはたとえを用いて話された。8:5 「種を蒔く人が種蒔きに出かけた。蒔いているとき、道ばたに落ちた種があった。すると、人に踏みつけられ、空の鳥がそれを食べてしまった。8:6 また、別の種は岩の上に落ち、生え出たが、水分がなかったので、枯れてしまった。8:7 また、別の種はいばらの真中に落ちた。ところが、いばらもいっしょに生え出て、それを押しつぶさしてしまった。8:8 また、別の種は良い地に落ち、生え出て、百倍の実を結んだ。」イエスは、これらのことを話しながら「聞く耳のある者は聞きなさい。」と叫ばれた。

有名な、種まきの喩えであります。彼らにとっては、この風景はごくありふれたものでありました。第一の道端というのは、畦のことです。土で踏み固められています。そして第二の岩地ですが、これはイスラエルにしばしば見かける光景です。岩地が多いのですが、その土はとても薄いのです。花が咲くにも早いです、しぼむのも早いです。そして第三の土地はとても肥えています。肥えているから、かえって雑草もしっかりと生えて、目的の実を結ばせることができません。けれども第四の土地は肥えていながら、なおかつ雑草を抜き取っています。

ここで大事な言葉は、今晚学ぶべき言葉は、「聞く耳のある者は聞きなさい」であります。これは、単に聞くことではありません。聞いたことが、いったいどのような真意を含んでいるのか探してみる、という意味合いを含めた言葉です。

## 2B 尋ねる者へ解き明かし 9-15

8:9 さて、弟子たちは、このたとえがどんな意味かをイエスに尋ねた。8:10 そこでイエスは言われた。「あなたがたに、神の国の奥義を知ることが許されているが、ほかの者には、たとえて話します。彼らが見ていても見えず、聞いていても悟らないためです。

イエス様は、喩えの目的を弟子たちにお語りになっています。イエス様の喩えは、例話とは違います。例話であれば、一つの真理を分かり易くするために、例えて話します。けれども、イエス様の喩えは真理の入口、きっかけにしか過ぎません。真理が分かるようには語られていないのです。むしろ、これはどういうことなのか、その真意を熱心に尋ねることによって明らかにされるものだ、ということです。

弟子たちはその資格と特権を持っていました。イエス様と共に過ごしていたからです。この方と共にいることを、女たちもそうですが選び取ったのです。そのために、イエス様が語られたことが何であるかを、いつでも、どこでも尋ねることができました。この情熱に支えられた質問こそ、先ほどの「聞く耳のある者は聞きなさい」と言われたイエス様の言葉の真意であります。

したがって、他の人々には見えていても見えず、聞いていても悟りません。ここが大事です、無知というのは、本当に知らない、情報が知らされていないから無知なのではありません。見ようとしていない、聞こうとしていないから聞こえないし、見えないのです。弟子たちと同じように、近くまで来て、触って、共に時間を過ごして、それで聞こえてくる言葉なのです。

8:11 このたとえの意味はこうです。種は神のことばです。8:12 道ばたに落ちるとは、こういう人たちのことです。みことばを聞いたが、あとから悪魔が来て、彼らが信じて救われることのないように、その人たちの心から、みことばを持ち去ってしまうのです。8:13 岩の上に落ちるとは、こういう人たちのことです。聞いたときには喜んでみことばを受け入れるが、根がないので、しばらくは信じていても、試練のときになると、身を引いてしまうのです。8:14 いばらの中に落ちるとは、こういう人

たちのことです。みことばを聞きはしたが、とかくしているうちに、この世の心づかひや、富や、快樂によってふさがれて、実が熟するまでにならないのです。8:15 しかし、良い地に落ちるとは、こういう人たちのことです。正しい、良い心でみことばを聞くと、それをしっかりと守り、よく耐えて、実を結ばせるのです。

三つの点でお話しします。一点目は道端の喩えです。私たちは、常に霊の戦いの中にいることを知らないといけません。御言葉が伝わっていかないというのは、各人の頑なな心のためではあるのですが、悪魔がいつも来てそれを摘み取っていくという行為をしているという現実です。御言葉を聞くということ自体が、霊の戦いだということです。第二点目は、信じていると言っているのに実を結ばない人々の問題です。岩地は、心は堅いままにしているのに、表面的に反応している状態です。ですからこの人は、他の人々から本当に信じたように表面的には見えます。しかし、心の奥底まで御言葉が入っていません。もう一つの茨は、御言葉を深く心に受け入れているのです。ところが、同じように思い煩っていること、富なども心の奥底にあります。御言葉を受け入れているけれども、他のものもどんどん受け入れてしまっている状態であります。神の言葉と世は相容れませんから、いつしか限界が来ます。

ではどうすればよいのか？四つ目ですが、良い土地に種が落ちることです。御言葉を心から受け入れるだけでなく、心にある思い煩いや、自分のしたい楽しいことや、汚れや罪を捨て去ることが必要になります。このようにして御言葉によって清めが起こります。それによって、聖なる御霊が働いてくださり、その実が百倍にまで結ばれるのです。そこに必要なのは、一つは「正しい、良い心」ですね。主の前にへりくだる心であります。そして次に「忍耐」です。信仰には忍耐が必要になります。それで実を結ばせることができます。

### 3B 現れる奥義 16-18

8:16 あかりをつけてから、それを器で隠したり、寝台の下に置いたりする者はありません。燭台の上に置きます。はいつて来る人々に、その光が見えるためです。8:17 隠れているもので、あらわにならぬものはなく、秘密にされているもので、知られず、また現われないものはありません。8:18 だから、聞き方に注意しなさい。というのは、持っている人は、さらに与えられ、持たない人は、持っていると思っているものまでも取り上げられるからです。」

イエス様は、依然として御言葉を聞くことについてお話しになっています。初めの例え、明かりを燭台の上に置くというのは、他の福音書では自分の内に与えられた神の光を輝かせる、という意味合いで使っています。しかし、ここでは違います。イエス様が語られている言葉、神の国についての言葉は燭台に置かれた光のようなものであり、確かに明らかにされるのだという励ましです。ですから、神の国の奥義についていつまでも隠されていることはなく、必ず明らかにされます。だから、しっかりと聞きなさいとイエス様は注意を促しておられるのです。そうすれば、どんどん明らかにされます、と励ましておられます。

そして、聞く人とそうでない人との二手に分かれます。聞く人は、今の生活でも必要が満たされて充足した生活が遅れますが、後の世にはさらに永遠の命が与えられます。けれども、聞かない人は持っていると思っているこの命と幸せが、取り除かれる時がやって来るのだよ、という意味です。

### 3A 聞く者たちの信仰 19-25

このように、聞く者たちについてイエス様は語られました。次の二つの出来事、19 節から 25 節までの出来事は、まさにイエスが語られた神の国の姿がよく写し出されている内容であります。

#### 1B 新しい家族 19-21

8:19 イエスのところに母と兄弟たちが来たが、群衆のためにそばへ近寄れなかった。8:20 それでイエスに、「あなたのおかあさんと兄弟たちが、あなたに会おうとして、外に立っています。」という知らせがあった。8:21 ところが、イエスは人々にこう答えられた。「わたしの母、わたしの兄弟たちとは、神のことばを聞いて行なう人たちです。」

イエスの肉の家族がやって来ました。マリヤがおり、そして半兄弟ですがヨセフとマリヤとの間に生まれた弟たちがやって来ています。しかしイエス様は、神のことばを聞いて行なう者たちがご自分の家族であると言われています。

ここに、イエス様は新しい共同体の導入を行われています。肉の家族がありながら、神の家族が始まっています。別の言い方では、この地上の家族の中に神の国が入ってきました。神の言葉に聞き従う者たちによって、その共同体が新しくできているのです。これが、私たち教会であります。イエス様のそばにいること、イエス様の語られていることを学ぶこと、そして聞き従うことができている人々の間に、神を父とした、そしてイエス様を長子とした、共同体ができています。

これは、新しく信じた人々には大きな挑戦です。これまでの強い結びつきのある肉の家族から、神の御霊によって切り離されました。いや、肉のつながりはあるのですが、神との結びつきによって新しい家族に入ったのです。したがって、肉のつながりのある人々が、イエス様の家族のようにいったいどうしたことかと心配したり、反対したり、動揺したりするのです。もう一つは、たとえ信じていると言っている者たちの間でも、御言葉に聞き従っている人々とそうでない人々との間に分かれるということです。なぜ、教会を離れてしまうのか？その教会自体に問題があり、イエスの命令に従っていないということもありますし、また自分自身が神に聞いていないという問題があります。つまり、御霊による一致、神の家族の意識は、イエスの御言葉に心を傾け、尋ね求め、何とかして聞いていこうとする者たちによって保たれます。

#### 2B 嵐の中の訓練 22-25

8:22 そのころのある日のこと、イエスは弟子たちといっしょに舟に乗り、「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう。」と言われた。それで弟子たちは舟を出した。8:23 舟で渡っている間にイエスはぐっすり眠っ

てしまわれた。ところが突風が湖に吹きおろして来たので、弟子たちは水をかぶって危険になった。8:24 そこで、彼らは近寄って行ってイエスを起こし、「先生、先生。私たちはおぼれて死にそうです。」と言った。イエスは、起き上がって、風と荒波とをしっかりとつけられた。すると風も波も治まり、なぎになった。8:25 イエスは彼らに、「あなたがたの信仰はどこにあるのです。」と言われた。弟子たちは驚き恐れて互いに言った。「風も水も、お命じになれば従うとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。」

この出来事は、多くのことを私たちに教訓として教えてくれる話です。この話の理解は、イエス様が最後に語られたところです。「あなたがたの信仰はどこにあるのです。」であります。しかし弟子たちの理解は、イエス様の命令に風や水が従うということに驚いている、ということです。じっくり見てみましょう。

イエス様は、初めに「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう。」と言われました。これがイエス様の言葉でした。そして向こう岸に渡るというイエス様の何気ない言葉を弟子たちは聞いていたはずですが、しかし、これは神の言葉だったのです。ですから向こう岸に行けるのです。嵐が来ようと思えます。しっかりと聞いて、その真意を思い巡らしながら、いっしょに行動していく必要がありました。ところが、何となく聞いてしまったのです。

そして、嵐です。ここで大事なことは、イエス様がぐっすり寝ておられるということです。これこそが、神の国の奥義を表しており、嵐のような状況であっても父なる神への信頼の中でぐっすりできるのです。しかし、弟子たちは嵐によって自分たちで何とかしなければいけないと思ってしまいました。神への信頼がどこかに行ってしまいました。さらに、イエス様をなじることまでしました。私たちもしませんか、嵐のような試練において、神がなぜこのようなことを許されたのか、なぜこのように自分を大変な思いをすることを許されたのかなじるでしょう。

さらに、イエス様は嵐を叱りつけられました。もちろん、これはイエス様の御言葉の権威を表しています。しかし弟子たちは、ここにあるイエスの御言葉の力に驚くばかりで、もっと大切な、嵐の中でも安眠していただけるということの価値を見出していなかったのです。私たちも、大変なことが起こり、そのことについて助けてくださいと叫び、どうして助けてくださらないのですかと神を責め、神が憐れみによって介入してくださるのですが、その時に助けられたことを喜んでいて、肝心の世の騒ぎの中でも安きを得ることを忘れてはいないでしょうか？

神の国とはこれだけの力を持っています。それは父なる神に全き信頼を置いているイエスご自身であり、私たちはこの方への信頼によって御国にあずかることができます。そのためそして、しっかりと聞いて、尋ねて、真意を得ていくのです。